様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１５日現在

機関番号：３２６３５
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１３２００３２
研究課題名（和文）隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究

研究課題名（英文）Studies on the faith of Sarira and decoration in the Sui and Tang dynasties.

研究代表者
加島　勝（KASHIMA MASARU）
大正大学・文学部・教授
研究者番号：80214295

研究成果の概要（和文）：隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関して〔場所〕、〔表現〕、〔受容〕という従来にない独創的な観点から、以下のような研究成果をあげることができた。

〔場所〕仁寿元（601）年に隋文帝が建立を指示した 16 の寺院のうち７ヶ寺の起塔地を特定した。

〔表現〕仁寿舎利塔の現存唯一の遺物である陝西省耀州神徳寺址出土の舎利石函の図様が儒仏道の習合という観点から分析される必要があることをつきとめた。

〔受容〕仁寿舎利塔址に遺存する碑文や舎利容器の器形変化の分析を通して、「仁寿舎利塔をめぐる後代の受容史」という、新たな問題の重要性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：We focused on the faith of Sarira (Buddha's bone)　and decoration in the Sui and Tang dynasties. Specialist art history, archeology, history, and conservation science has done a field research in China.

As a result, from the viewpoint of [location], [expression], [reception], was found to be as follows.

[location] We determined the location of the place where 7 out of 16 temples of the Emperor *Wen* has directed the construction in the year 601 AD.

[expression] Expression of the stone coffin excavated from the ruins of　*Shaanxi* province *Shen De Si* temple, which has the only existing stupa, was found to be Confucianism, Buddhism, and Taoism are involved.

[reception] Through the analysis of the stone monument and Sarira casket, we pointed out the new subject about reception of Sarira.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
２０１０年度	3,300,000	990,000	4,290,000
２０１１年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
年度			
年度			
総　計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術史

１．研究開始当初の背景

『広弘明集』巻 17 によれば、隋文帝は、自ら封印した瑠璃製の舎利容器を分配し、仁寿元年（601）から 3 度にわたって中国全土 113 州に舎利塔を建立した（仁寿舎利塔）。これは、同じ文帝による大興国寺とともに、諸州一斉の仏教事業の端緒を拓くものとして知られている。この事業については、戦前より仏教史の分野で研究が続けられてきた（佐々木功成「仁寿舎利塔考」、山崎宏『支那中世仏教の展開』）。また、美術史の分野では、小杉一雄による先駆的かつ重要な仕事がある（『中国仏教美術史の研究』新樹社、1980 年）。これらの成果は主に文献によりながら行われたものだが、近年の中国考古学の成果はめざましく、舎利塔址の発掘例は増大の一途を辿っている。仁寿舎利塔を含む舎利信仰の問題は、出土遺物に即して具体的に検証すべき段階に至っている。

このような問題意識から、研究代表者は、奈良シルクロード財団助成研究「中国・シルクロードにおける舎利荘厳の形式変遷に関する調査研究―隋唐時代の棺形舎利容器と埋葬儀礼の関わりを中心に―」（2001～2002 年度）を組織し、西域及び中原の舎利容器と関連美術について調査を行ない、隋唐時代の舎利信仰と造形の基本的な問題を整理した（『中国における舎利荘厳の形式変遷に関する調査研究』シルクロード学研究、2004）。本研究はこの延長線上に、より詳細な現地調査はもとより包括的な分析を行なうべきものとして企画された。

２．研究の目的

仏舎利はいうまでもなく釈迦の遺骨である。しかし『大智度論』（3 世紀、伝龍樹撰、鳩摩羅什訳）が、舎利には般若波羅蜜が薫じこまれ、変じて宝珠となると説くように、それ自体が多くの利益を授ける特別な聖遺物とみなされてきた。舎利は大乗仏教における最も重要な礼拝対象であり、したがって、各地域、各時代の信仰と思想を反映しつつ様々に荘厳された。本研究は、特に隋唐時代の舎利荘厳に注目し、その実際を美術史（彫刻史、絵画史、工芸史）、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が詳細に調査し、基礎資料を集積するとともに、造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的に考察を加えるものである。

３．研究の方法

本研究で扱う研究対象は、以下のように隋代と唐代の二つに大きく分かれる。

(1) 仁寿舎利塔と造形

① 仁寿舎利塔の立地

隋代の仁寿舎利塔に関して、文帝は「隋国立舎利塔詔」（『広弘明集』）の中で、16 カ所の寺をあげ建立地を具体的に指示し、それ以外でも「山水を有する所」に起塔すべきと述べている。文帝の指示による寺は、五岳（泰山、衡山、嵩山、華山、恒山）に関わる寺など、その多くが神山ゆかりの寺である。そもそも、この舎利塔の起塔は、仏の感応を期待したものであり、王邵の「舎利感応記」には、起塔によって起きた様々な奇瑞が記録されている。文帝の立地に関する指示は、期待された感応が舎利塔の立地と深く関わっていることを導く。

この仁寿舎利塔の遺址として、現在、神徳寺跡（耀県）、仙遊寺塔跡（周至県）、岐州鳳泉寺（扶風県）、同州大興国寺（大荔県、以上陝西省）、潞州梵境寺（長治県）、栖巖道場（永済市、以上山西省）、鄧州大興国寺（南陽市）、嵩岳寺（登封県、以上河南省）、勝福寺（山東省青州市）が知られている。このうち、神徳寺跡と仙遊寺跡は極めてよく似た立地であることが研究分担者（長岡）の実査によって確かめられている。本研究では、これらの塔址に加え、「隋国立舎利塔詔」に載る起塔地推定地を現地調査し、その立地が具体的にどのようなものであり、それが当時の信仰・思想とどのように関わっているかを具体的に検証し、舎利信仰と土地の関連について考察する。

② 仁寿舎利塔出土遺物と釈迦の葬礼

また、「慶舎利感応表」は、仁寿舎利が埋納されたときの諸州の光景を伝えているが、その中には、参集した道俗が舎利を前にして非号したという記述もある。すでに小杉一雄が指摘した通り、舎利を埋納するという儀式は、釈迦の葬礼に擬されたものあったことがここから窺える。

上述した仁寿舎利塔の遺址のうち、舎利容器が出土している事例は、神徳寺跡と仙遊寺塔跡の 2 例である。このうち、隋に遡る舎利容器を含むのは神徳寺で、地宮からは、石函・銅盒・瑠璃製の舎利容器と多くの副葬品が発見された。現在は簡単な報告（『考古』1974 年 2 月）がなされているに過ぎないが、これらの遺物は、仁寿舎利塔への信仰の解明に不可欠な情報を含んでいる。特に石函の表面には、悲号する金剛力士や十大弟子が描かれており、舎利埋納の意味を、図像を通して伝えている。本研究では、石函に加え、銅盒、瑠璃器の荘厳を関連作品とともに詳細に調査し、造形面から仁寿舎利塔の信仰を具体的に解明する。

(2) 唐代の舎利信仰と造形

① 大雲寺舎利容器の調査と分析

神徳寺の舎利容器（外容器）は覆斗式の蓋を伴う方形盒である。これに対し、大雲寺跡（甘粛省涇川県）で発見された舎利容器（外容器）は「棺形」をしている。大雲寺は則天武后により延載元年（694）に諸州に建てら

れた寺院であり、この舎利容器はその時期の遺例である。前方を高く後方を低くした片流れ式の棺形舎利容器は、その後の舎利容器に連綿と継承される基本形式となるが、その初例が則天武后期の大雲寺の遺品である。つまり、舎利容器は、この時期に容器形から棺形へと大きく形式を変化させた。その理由は、舎利の埋納を釈迦の葬礼に擬すという隋代にあらわれた概念を承け、それを器形に直截的に示す意識があったゆえだろう。本研究では、大雲寺舎利容器を詳細に調査し、棺形舎利容器成立の過程を、造形を通して考察する。

② 慶山寺塔跡地宮と出土遺物の調査・分析

慶山寺塔跡（陝西省西安市臨潼区）から発見された地宮は、伴出した舎利塔記碑銘より盛唐の開元 29 年（741）に埋納されたことが知られる。出土品は、石造製品（舎利塔記碑、門、宝帳）、陶磁製品（黒釉鉢、彩絵瓶、三彩三足盤、白磁碗等）、金銀製品（金棺、銀槨等）、銅製品（据香炉、水瓶、鉢、脚付杯）、ガラス製品（舎利瓶）と多岐にわたっている。棺形をなす銀槨の両側面には悲号する十大弟子が描かれているように、この舎利埋納の基調をなす信仰もまた釈迦の死への追悼にある。加えて注目されるのは、地宮の主室と甬道の壁面に描かれている壁画である。主室の北壁には、中央に山岳景、その左右には男女の神仙が、東西壁には奏楽菩薩と比丘が描かれている。この主題の意味はまだあきらかとなっていないが、少なくとも、ここにも仏教と山岳信仰の習合が確かめられる。本研究では、岳廟や墳墓壁画の関連調査を併行させつつ、この事例を遺物・壁画・立地を含めて総合的に分析し、唐代舎利信仰の実態を解明する。

４．研究成果

本調査研究を実施した結果、隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関して、〔場所〕、〔表現〕、〔受容〕という従来にない独創的な観点から、以下のような研究成果をあげることができた。

〔場所〕文帝は仁寿元（601）年の第一回目の起塔にあたり１６の寺院を自ら注し塔を建てるよう指示した。本研究において、これらの寺院のうち、岐州鳳泉寺、雍州仙遊寺、嵩州嵩岳寺、泰州岱岳寺、定州恒岳寺、廓州連雲岳寺、牟州巨神山寺、呉州会稽山寺、蒲州栖巌寺、蘇州虎丘山寺、涇州大興国寺の１１ヶ寺を現地調査し、そのうち、７ヶ寺で起塔地をほぼ特定した。これらの成果により、文帝が自注した寺は、a. 神山に付属する、b. 神仙的伝統を有する、c. 神廟に近接する、d. 古代堪輿術（風水思想）に適う地形の中にある、という特色を持つことが明らかになった。また、自注寺院ではないものの第一回目の起塔地である秦州静念寺は麦積山石窟に付属する瑞応寺であることを確認した。つまり、起塔地は、e. 石窟に付属する、という条件を備える場合もある。これらから、起塔地は、隋以前から続く古い宗教的歴史を持つ土地が選ばれていることが明らかになった。このことは舎利塔の建立が神明の召還を目的としていたことと特に関連し、神明の感応を呼ぶ土地が選ばれたと理解するのが適切である。

〔表現〕仁寿舎利塔の現存する唯一の遺物である陝西省耀州神徳寺址出土の舎利石函の拓本を入手し、図様について詳細に分析を加えた。神徳寺舎利石函の南北面には、舎利容器及び宝珠に向かい悲嘆する金剛力士と十大弟子が描かれている。舎利荘厳の意味は、舎利図像を生む舎利観、葬礼における悲嘆の身振りとの関係がここに見いだされる。また、『廣弘明集』には、石函が山水・仙人・麒麟などの図様をあらわしたとする事例（徐州浄道寺）がある。石函の図様は、今後、儒仏道の習合という観点から分析される必要がある。

〔受容〕仁寿舎利塔址に遺存する、栖巌道場塔碑（栖巌寺、陝西省）、重修廣福寺記（勝福寺、山東省）、龍蔵寺碑（河北省）、往生碑（大禹寺、浙江省）などの碑文の文字情報を採取し読解に努めた。これらの碑文は、仁寿舎利塔が、同時代あるいはその後の時代にどのように受け止められていたのかを示すものである。また、仁寿舎利塔には後に重修がおこなわれている事例がある（雍州仙遊寺、涇州大興国寺、蒋州棲霞寺）。このことは、仁寿舎利塔が後代にも崇敬を失わなかったことを示しているが、その際に、塔形や器形を変化させてあらたな起塔や埋納がおこなわれている場合がある。特に涇州大興国寺では、内容器が棺形となるという重大な変化が生じている。これは、その時代の思想に基づいて器形が選ばれた結果である。ここから仁寿舎利塔をめぐる後代の受容史という問題の重要性が浮かび上がった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

『隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究』研究成果報告書（概報）、2012、128

６．研究組織

(1)研究代表者

加島　勝（KASHIMA　MASARU）
大正大学・文学部・教授
研究者番号：８０２１４２９５

(2)研究分担者

松本　伸之（MATSUMOTO　NOBUYUKI）
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部長
研究者番号：３０２２９５６２
和田　浩（WADA　HIROSHI）
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部保存修復課環境保存室・主任研究員
研究者番号：６０３３２１３６
東野　治之（TONO　HARUYUKI）
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：８０００００４９６
泉　武夫（IZUMI　TAKEO）
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：４０１６８２７４
長岡　龍作（NAGAOKA　RYUSAKU）
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：７０１８９１０８
岡林　孝作（OKABAYASHI　KOSAKU）
奈良県立橿原考古学研究所・企画課・総括研究員
研究者番号：８０２５０３８０